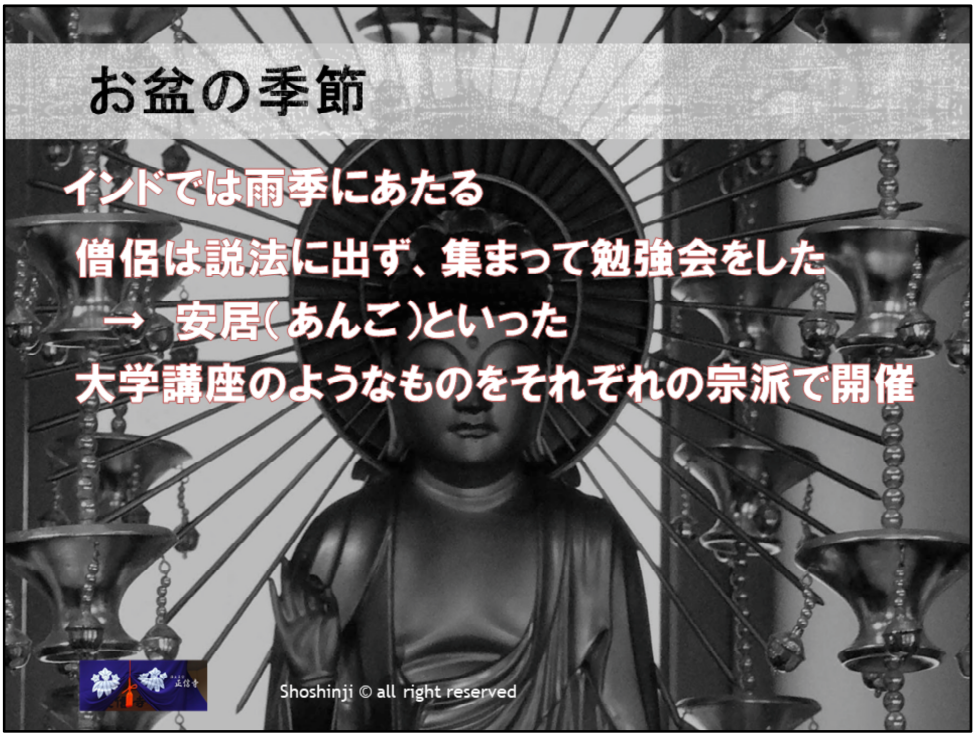


平成29年のお盆法要の法話

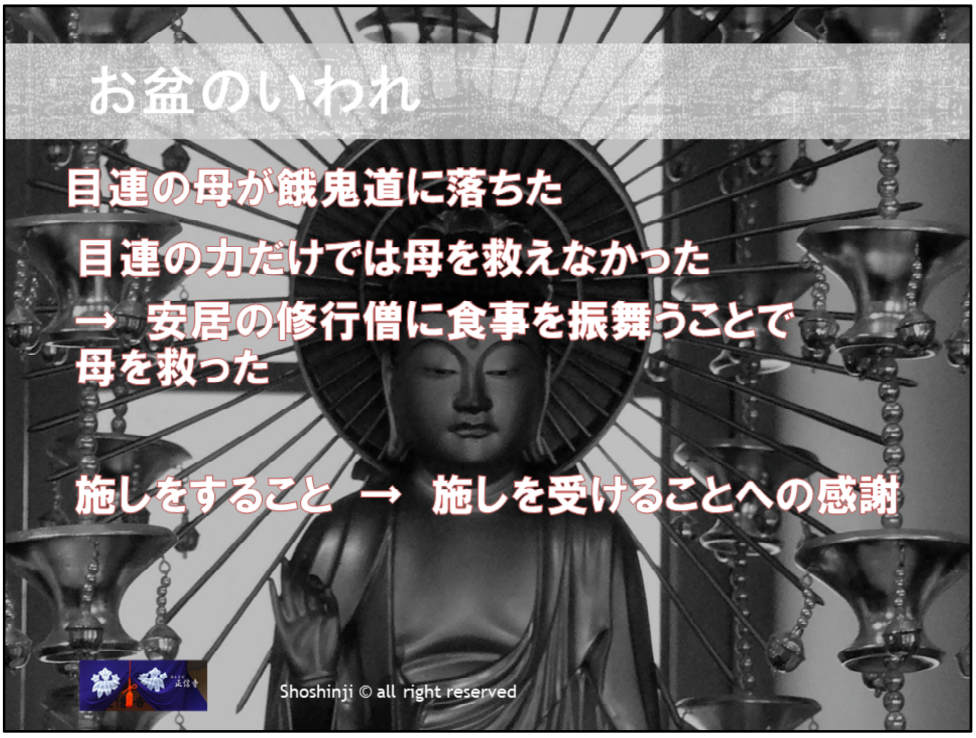
お盆について少し話した後、浄土真宗における真と仮についてお話しします。



まずはお盆について



お盆は、僧侶にとって勉強の季節です。
仏教の他の宗派でも大学講座が開かれます。



盂蘭盆会は、生前の行いが悪いため「餓鬼道」や「地獄道」に落ちた人の苦しみを救うため、その人に代わり功徳を積み、その功徳を他の衆生（しゅじょう：生きとし生けるもの）に施す供養で、「逆さに吊るされるような苦しみを除く」という意味を持つ行事となっています。

お釈迦様の第十弟子の一人で「神通力」の第一人者といわれる、目連尊者（もくれんそんじゃ）が、初めて神通力を得た時のこと。
目連尊者は、亡き父母に何かできないものか？と思い、その力を使って探したところ、餓鬼の中で何も飲み食いができず、苦しんでいる母親を見つけました。
何とか母親を助けたいと思った目連尊者は、鉢に盛ったご飯を差し出します。でも、母親がご飯を食べようとすると、口に入れる前に炭になってしまい食べることができません。

目連尊者は号泣し、お釈迦様のところへ戻って、母親の話をしました。
すると、お釈迦様は「あなたのお母さんの罪は重かったようで、あなた一人の力ではどうにもできません。」と諭したあとに、
「旧暦7月15日（現在の8月中旬頃）に安居（あんご）の修行を終えた、修行僧達にたくさんのごちそうをして、心から供養しなさい。そうすれば、父母も先祖も親族も三途の苦しみから逃れることができて、時に応じて解脱し、衣食には困らないでしょう。」と、おっしゃいました。
目連尊者が、お釈迦様に言われたとおりにすると、母親は餓鬼から逃れることができ、無事に往生することができました。

目連尊者は、母親を餓鬼から救うことができた事に感激し、この慣わしを、後々までに残したいとお釈迦様に申し出ます。すると、お釈迦様は・・・

旧暦7月15日にいろいろな飲食を盆に盛り、同じように仏や僧や大勢の人たちに供養すれば、その功徳によってたくさんの先祖は苦しみから救われ、今生きている人も幸せを得ることができるでしょう。と、おっしゃいました。
この行いが、お盆行事の始まりと言われています。

ただ、古来日本には「御霊（みたま）祭り」という祖先崇拝の風習があり、盂蘭盆経が仏教と共に伝来したあとに、双方

が融合することで、現在のお盆行事となっていったと考えられています。

歓喜会（かんきえ）ともいい、生きることの慶びを表すお祭りでもあります。
盆踊りは生きる喜びを踊りで表すものです。



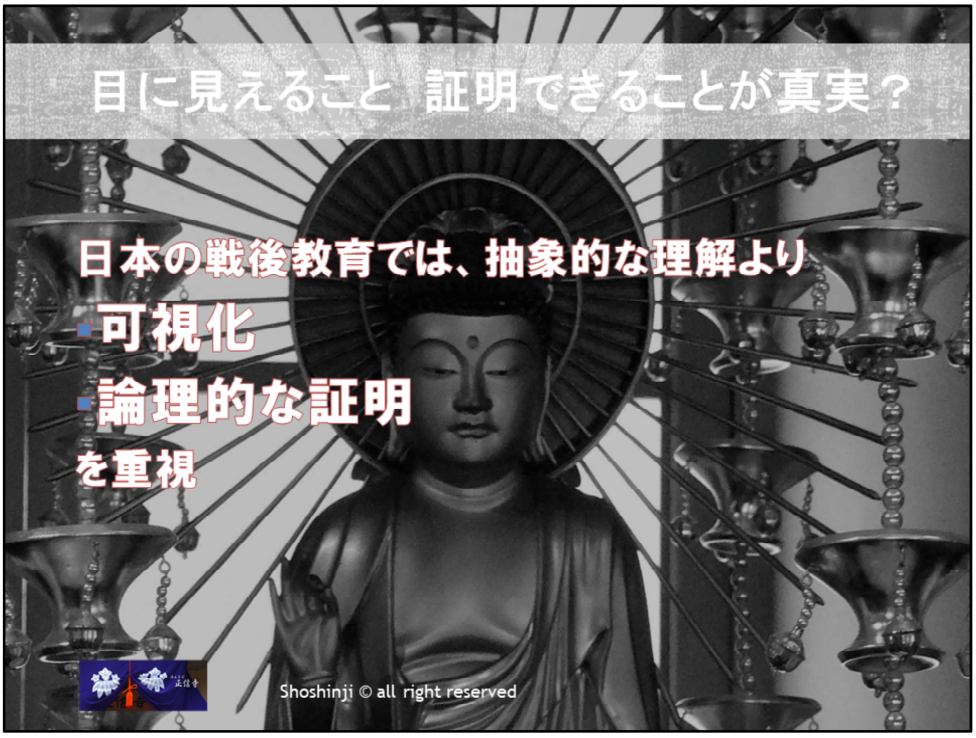
ここから真と仮についてお話しします。



仏像より絵像　絵像より名号

写実と抽象化

写真でも時間や季節、その地の気候などを表しきれません。
→　表現した瞬間に真実ではなくなります。



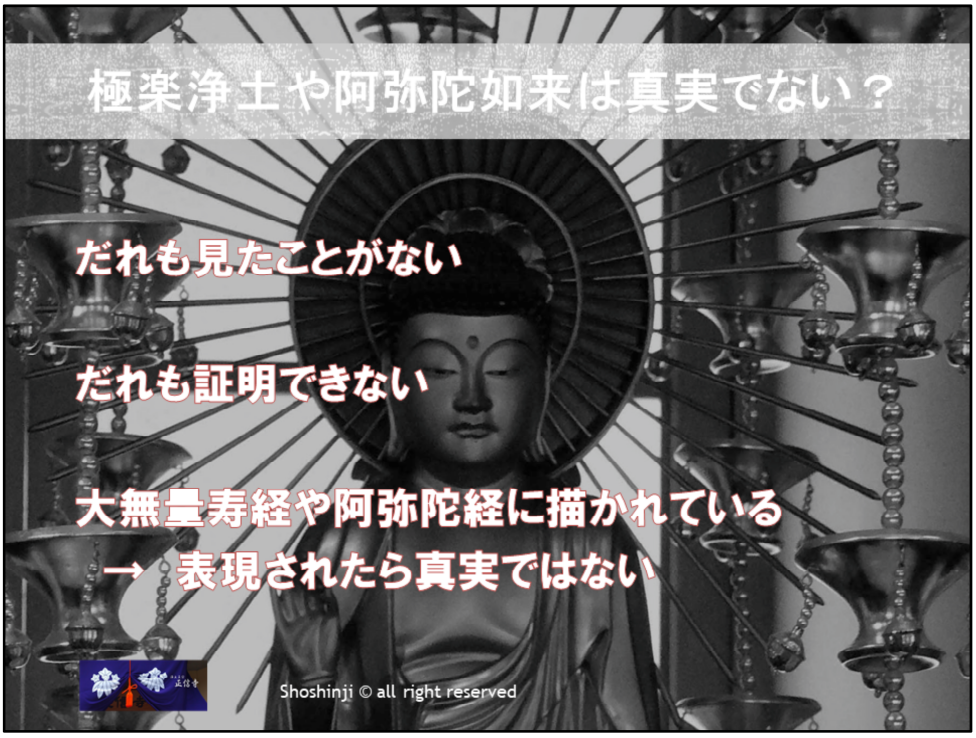
私たちの学校教育では、正しいものは目に見えるもの、論証できるものと言われてきました。

社会人になっても、仕事の見える化、数値化による論理的な証明が求められてきました。



しかし、目に見えたら本当に真実なのでしょうか。

バーチャルリアリティは目に見えたり、音が聞こえたりしますが、真実とは異なる世界です。



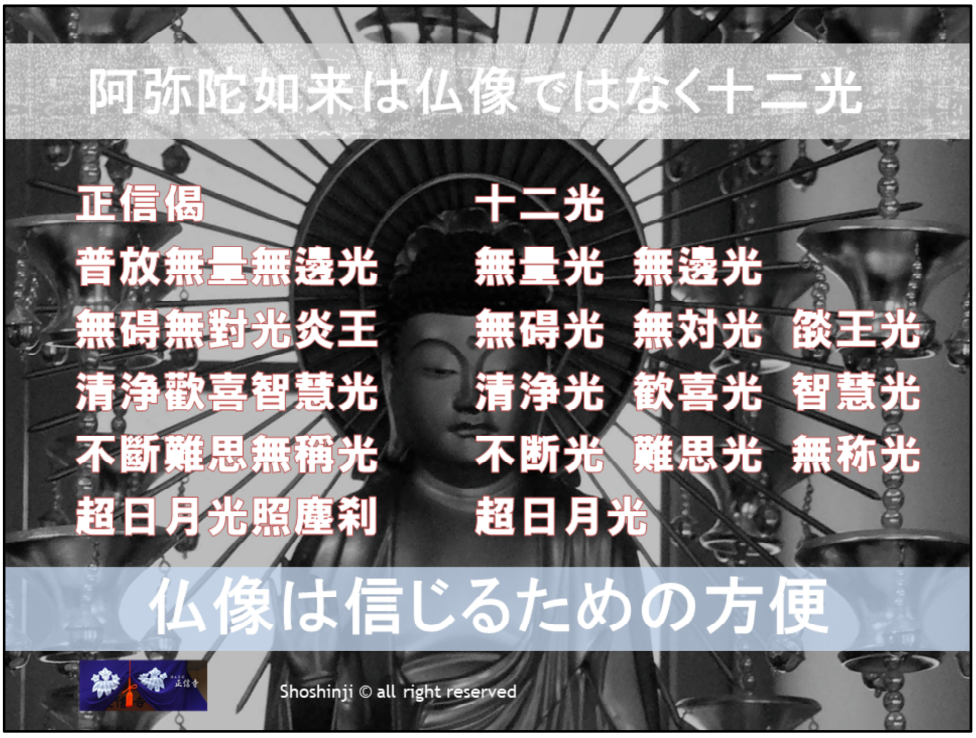
お経で説明されている極楽浄土や阿弥陀如来は、
だれも見たことがなく
だれも、正しいことを証明できません。

また、表現されたものは、真実とも違うように思います。



しかし、宗教者たちは、布教のため佛の姿や形を表現し続けてきました。

こうして、仏教美術が発展してきました。



阿弥陀如来は正信偈では十二の光として表現されています。

無量光　永久に無限の恵みをもたらす光明
無辺光　一切の世界をあまねく照らす光明
無碍光 (むげこう)　何ものにも妨げられない救いの光明
無対光　他に比べようのないほどすぐれている光
燄王光 (えんのうこう)　闇を焼き尽くす火炎のような阿弥陀仏の光明
清浄光 (しょうじょうこう)　罪垢を洗い流す清らな阿弥陀仏の光明。
歓喜光 (かんぎこう)　憎悪などの瞋恚を癒す阿弥陀仏の光明。
智慧光　生きとし生けるものの無知の闇を滅する光明
不断光　途切れることなく絶えず照らし続ける阿弥陀仏の光明。
難思光　言葉に表すことのできない阿弥陀仏の光明。
無称光　言葉で言い表せないほどすばらしい光明
超日月光 (ちょうにちがっこう)　日光や月の光を超えた光

皆様が拝んでいる仏像は十二光を理解するための方便



窓際から入ってきたゴキブリを見ることがあると思います。

殺虫剤を探している間にどこかに行ってしまいます。

本当は、外に行ってしまったかも、冷蔵庫の裏にいるかもしれない

そのことが気にかかって、眠れないことはありませんか？

目に見えないところにいて、存在が証明できないゴキブリに悩まされていることになります。

その時ゴキブリはあなたの心にいるのではないでしょうか？
→　気持ちに影響を与えるものも真実では？

心の中のゴキブリを追い出すには、ゴキブリが外に出て行ってしまうことを確認しなければなりません。



三法印（さんぼういん 梵: dharmamudrā-trilakṣaṇā[1]）は、バラモン教・ヒンドゥー教や六師外道のような他派の教えに対して、仏教（仏法）の教え・立ち位置を特徴づける「印」として、大乗仏教で主張されている三つの考えのこと。

諸行無常
　すべてのものは移り変わる
　平家物語 「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顕はす。奢れる者久しからず、ただ春の世の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ。偏に風の前の塵に同じ。」
　物の道理　情
諸法無我
　永遠不滅のものはない
　法　因縁＝縁起ですべての物事、事象は成り立つ
　我　Atoman　永遠不滅の本体
涅槃寂静
　悟りの世界では安らぎである
一切行区
　すべてのものは苦しみである
　一切皆苦ともいう

永遠不滅のものはないのだが、佛は不滅ではないの？

真実は二つあるのでしょうか。

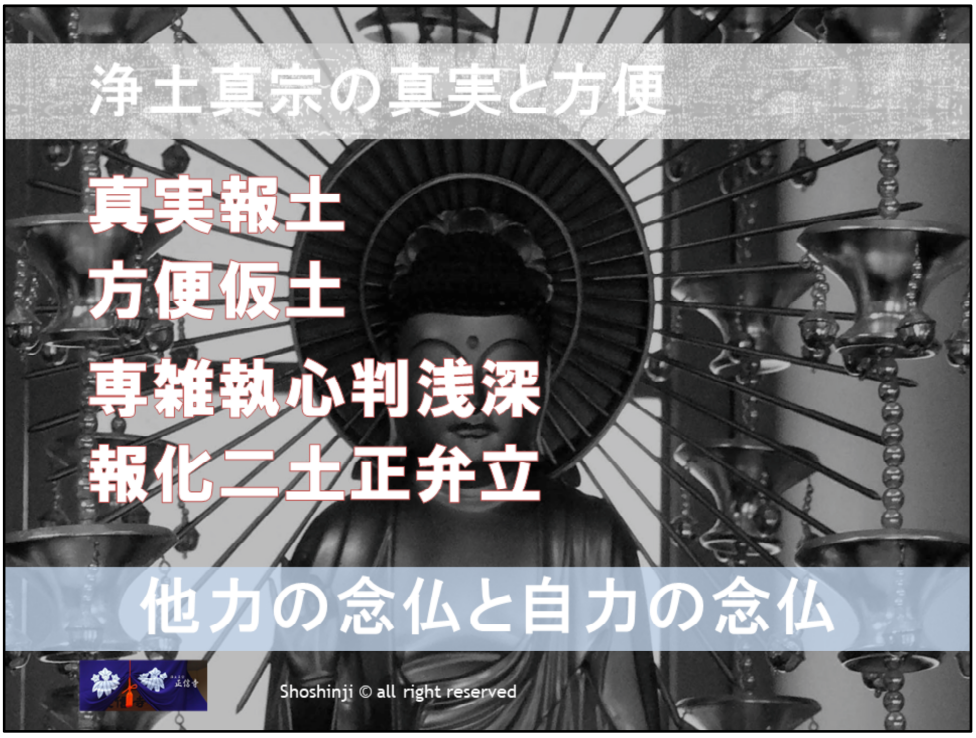


虚仮（こけ） ＝ 嘘・偽り

唯信鈔文意　六　善導散善義の文
真実は仏の中
我々が作り出すものは虚仮でしかない

念仏　阿弥陀如来が与えていただいた（信心の）念仏は真実の行
　　浄土往生しようとして念仏するのは虚仮の行

他力を完全に信じることは難しい
→　真の念仏をしようと思うことこそ虚仮



真実報土　阿弥陀如来の極楽浄土
方便仮土　雑業をした行者の逝く方便の浄土

専雑執心判浅深　報化二土正弁立

・『往生要集』巻下末（真聖全一・八九〇頁）
衆生の起行にすでに千殊あれば、往生して土を見ることまた万別あるなり。もしこの解を作さば、諸経論のなかに、あるいは判じて報となし、あるいは判じて化となすこと、みな妨難なし。ただ諸仏の修行、つぶさに報化の二土を感ずることを知れ。
・「行巻」（真聖全二・四五頁）専雑執心判浅深　報化二土正弁立
・「真仏土巻」（真聖全二・一四一頁）
それ報を案ずれば、如来の願海によりて果成の土を酬報せり。ゆゑに報といふなり。しかるに願海について真あり仮あり。ここをもつてまた仏土について真あり仮あり。（中略）すでにもつて真仮みなこれ大悲の願海に酬報せり。ゆゑに知んぬ、報仏土なりといふことを。

疑城は仏智を疑う者の行く浄土である。懈慢界（懈慢国土）は信機信法の二種深信の欠けた人がいく浄土であって、この疑城も懈慢界も共に衆生の因の上からいったものである。疑惑仏智や信罪信福を誡めて明信仏智や信機信法を勧めているのである。第十八願の他力信心のない人が、ただちに真実報土に往生

することは不可能である。そこで阿弥陀仏の悲願のてだてとして、この土で自力信にとどまっている人を化土に往生させ、そこで仏智疑惑を誡めさせ、化土から離れしめて真実報土に往生させようとする如来の慈悲心がはたらいているのである。結局は不純な願生者をして真実報土に帰入せしめんがための弥陀のてだてというべきであり、これによって真仮の分斉を明らかにしようとしているのである。



阿弥陀如来の存在は証明できません。
お経が正しいことも証明できません。

心で感じたこと　夢　など昔はもっと正しいものとして扱われていたのでは？と考えます。

私は真実は、真実を求める人の数だけあってもおかしくないと思っています。
何が真実で、何が虚仮かということに頭を悩ますのではなく、自分が生き生きとできる
信条に沿って、真直ぐに生きるようにしたほうが、個人的には良いと思っています。
そんしたなか、生かされているという感謝を感じることが重要です。

信心、希望、気持ちを託す、念仏（祈り）についてもっと考えていきたいと思います。